

第 5 号

発行所
鎌倉市材木座 6-17-19
光明寺中神奈川教務所内
浄土宗神奈川教区青年会

発行人
清水光致

編集者
浄青神奈川編集委員

私が青年会（神浄青）の一会員として末席に名を連ねて早くも七年の歳月が過ぎさり、この度、浄青第三期の会長の大役を受けることにあになりました。

浅学末輩の私もどきが、受ける器ではない気が先走って、荷の重さを痛感している次第です。

しかし受けた以上は、役目として何かをしていかなければならないと考えた時に、初代会長、平野仁司師は、青年会の土台を築かれ、前会長、柴田哲彦師におかれては、組織作りを精根を傾けていただきました。

このしつかりと出来上った青年会を、これからは、組織の充実に力を注いでいく時期ではないでしょうか。

我々会員一人ひとりが会長になられた気構えで「初心忘れるべからず」の心がけて、青年会の活動を思い「自行」に励んでいくならば、会の発展、又それが組織の充実につながるものである。

私達が忘れてならないことは、万人救済の教えである「称名念仏の信仰」の教えに会い得たる私共の宿縁の深さであります。

今の世の中で、考えさせられるのは物質的、経済的に恵まれ科学の発展に目がむけられすぎて、人間の精神的なものを軽視するように思われる現代社会の風潮であります。



会長 清水光致

す。

それがゆえに、「人間浄化」「社会浄化」を浄青キャンペーンにしている我々青年僧侶が、ラジオ、テレビ、新聞等の情報社会に生活していると、必然的に信仰の教えを目で見、頭で考え、学問で解き開きがちです。

汗を流して働く処に喜び、人間としての価値を見出すことが大切なのです。

単なる聞きおぼえ、習いおぼえのものでなく、体によって、体験によって把握して、

青年の第一歩は自覚から

— 大任を受けるにあたって —

今日只今から、自分自身の為にもっと積極的に青年会活動に参加してこそ、青年会員の意味あいがあるのです。

高僧の師がしきりに「今」の一瞬を大切にせよといわれたのも、自己の体験から出た実感であるに違いないのです。早足に過ぎ行く人生の旅程をもとに戻すことはできません。

私達が青年会員として現在をもっと大切に、又、一度しかない人生ならば、情熱を傾け悔いのない活動を誰もしたいと思われ

ます。

「牛水飲めば乳となり、蛇水飲めば毒となる」のとえのごとく、青年会の活動に参加すれば、乳となり、かならず得ることがあるのです。

我々は、一人では何もできないのです。「人と人との和」があればこそ、そこに自分も存在しうるのです。

会員相互が知り合い、話し合えること、それが人と人の出会いであり良縁なのです。私達青年僧侶がこの人との出会いの大切さを理解して、

を認解して、「人間浄化」「社会浄化」の為に「衆生と共に生かされる」ように力するならば、後々の為に体で会

得した体験を、生かすことが出来るのです。これからの青年会活動の為に、諸大徳の御指導を頂き、又、会員諸師の協力を切にお願いする次第です。



善導忌大結集と鎮西上人遺跡めぐり



(大本山善導寺本堂前にて)

全浄青主催による善導忌大結集は、去る三月三十一日、四月一日の両日にわたり、筑後平野の中央に位置する九州久留米の大本山善導寺に於いて開催された。善導大師千三百年遠忌を記念して企画されたものであるが、神浄青としては結集への参加を兼ねて鎮西上人の遺跡を訪ねる参拝の旅を計画した。

福岡空港到着後、貸切バスで市内の善導寺(善導大師像を迎えた地)、正定寺(開山の寺)を参拝した。特筆する事は善導寺に於いて鎮西上人御真筆『末代念仏授手印』(宗主)を拝観できたことである。

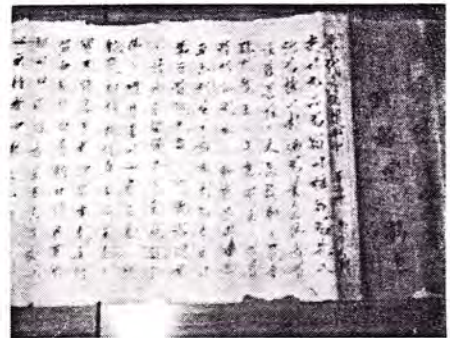
大本山善導寺に於いては日没法要の後、全国から寄せられた念仏署名を、大殿より釈迦堂まで念仏行道し釈迦如来前に奉納した。

続いて「善導大師と法然上人」と題して九大教授田村円澄師の中国視察をまじえた講演を拝聴した。二日目は大本山増上寺法主藤井実応台下より「善導大師讃仰」と題する御講演をいただいた。台下は「一身命財を抛つても有縁の人の為に法を説き、自らの往生の為に、諸の弊塵を離れて専ら念仏の行を修す。この二事の他に別の管みなし」(十六門記)と力強く言われた。これは善導大師の御姿そのものである。

閉会式の後、雨の中、貸切バスで八女市の天福寺(晩年隠遁の地)、熊本市の往生院(授手印制作の地)を参拝した。往生院では、小宝塔の中に安置され自然に地藏菩薩の形をした鎮西上人の御歯が印象に残る。三日目は北九州市八幡の吉祥寺(誕生の地)に参拝し、その後、韓国新羅仏教を訪ねる会員とは福岡空港で別れ、福岡市内の油山(修学の地)を見学後、空路東京へと飛び発った。三日間という短い日程ではあったが、終始、和やかな中にお互いの自己研鑽、交流を深める事が出来た。

(末代念仏授手印)

尚、全浄青大結集は全国から二百二名が参加したが、当教区からは、その一割に当たる二十一名が参加して大会を盛りあげた。最後に、心暖まる御接待を受けた各遺跡寺院の御住職、御寺族の方々、又、旅行の準備から計画まで色々とお世話を頂いた、港南組奥田実応師に深甚なる敬意を表する



(里見嘉嗣記)

韓国・新羅仏教を訪ねて

善導忌大結集と鎮西上人遺跡めぐりの後、帰県する会員と、新羅仏教を訪ねる会員と二組に別れた。

新羅仏教については先に金子寛哉師より説明があった。わすかな知識を得て韓国へ出発することになった。四月二日午後二時、福岡発韓国行航空機に塔乗し、港南組奥田氏の引率で柴田会長以下十一名が釜山へ飛んだ。私にとっては初めての海外旅行であり、胸がときめき、又緊張の連続でもあった。

空港からすぐ大韓旅行社



(仏國寺にて)

のバスに乗ってホテルに向かう。途中、韓国特有の建物、風俗等すべてが珍らしい風景であった。

翌日は旅行社の特別バスで慶州へ向かう。この慶州には、善導大師が活躍されていた頃、殆ど時を同じくして浄土教信仰を弘めた名僧慈藏、元暉、義相、義寂等がいた。慶州の国立博物館、芬皇寺を見学する。芬皇寺は新羅浄土教に因縁の深い慈藏、元暉法師の遺跡地である。つづいて皇竜寺遺跡、石窟庵、仏国寺迄の慶州市内コースは宗栄祚氏が流暢な日本語で懇切丁寧なガイドをして下さった。特に仏教に関しては造詣が深く、仏跡を訪ねた我々一行にとっては大変恵まれた一日目であった。

二日目は梵魚寺を拝観し、親しみのある説明に耳を傾ける。竜頭公園は丘陵と云った感じで、頂上より釜山港が一望できる。日本の公園とは景観がちがいが、まさに異国に立っている情趣があった。

正味一日半の短く忙しい日程であったが、善導大師と同時代の遺跡地に巡拝できた事は、一同善導大師千三百年遠忌を迎えるにあたり、大変有意義な旅であったことをしみじみと感じている。

(大谷正憲記)



第二回 花まつり愛のプレゼント活動 母子とともに降誕を祝う

昨年に引き続き第二回花まつり愛のプレゼント活動が四月十四日(土)、前回と同じ「金沢母子寮」で開催された。

教区内の皆様から寄せられたプレゼント品を整理し、車に満載して会場へ向った。母子寮へ着くと顔なじみとなった子供達が、母親達が階段の上から顔をのぞかせ、はにかみながら再会を喜び合い、あいさつを交した。

花まつりの儀式は昨年と同様、花御堂を飾り、子供達代表による献香、献華、讃仏歌の斉唱、誓いのことは合唱の後、導師のお話をもって第一部を終了した。

アトラクションは、森泰彦師のパネルシアター、ゲーム等により、大変楽しく遊ぶことが出来た。

最後に寮長先生のお言葉として、

「この金沢母子寮は、日常的にも子供達と遊んでいただけるボランティアを受け入れていますが、特に釈迦生誕の喜びを記念するこの花まつりは、子供達の生涯の楽しい思い出として非常に有意義な催しであるので、ぜひまたお願いしたい」と丁寧なお礼の言葉を頂いた。

なお寮長先生は日大在学



当時、椎尾井匠先生の講義を受け、感銘され「共生会」に参加されていたそうである。

皆様からのプレゼントは「神奈川県社会福祉協会ボランティアセンター」を通じ、更には他の施設へもプレゼント出来ましたので併せてお礼申し上げます。(石川成弘記)



子どもからの手紙

先日は、おしゃか様のお誕生日をお祝いさせて頂いたこと、とてもうれしく思います。……

今年出席してみると大変楽しく、わかりやすく説明して下さって、おしゃか様に関する話もとても勉強になりました。

花まつりの次の日、学校でおしゃか様の話をしあげたら、みんな感心すると同時に、とてもよろこんで



くれたので、話している私までうれしくなってきました。

プリントと一緒に頂いた本は、これから少しずつ読んで勉強してゆき学校で又は母に話してあげたいと思っています。本当にありがとうございました。

S子

この他、寮長先生はじめ数名の方より御礼状を頂きました。

第七回 関東ブロック 浄青研修会報告

「宗教を現代に問う」をテーマのもとに、六月九・十日、善光寺(甲府)に於て催され、当会より十二名の参加。第一日目、毎日新聞のシリーズでおなじみの佐藤健氏を迎えての講演であった。氏は記者でありながら臨済宗より「大仙」の号を授与されるなど、非常なるバイタリティに溢れ、その話し振りは、ユーモアを交えて、聴衆を魅了!

夕方より懇親会を行い、各教区の「機関紙」を配布して活動報告の後、山梨名産のワインで乾杯、各自自満の呷を披露した。別席では、佐藤氏と囲んで深夜に及ぶディスカッションが行なわれた。

第二日目、永平寺東京別院の岡本幹翁先生より一人間の基本姿勢としての禅の題で、お話しと御指導を受け、短い時間であったが坐禅を体験する。一同、禅の辛さが身にしみた様であった。最後に念仏行脚により善光寺にもどり解散、有意義な二日間であった。

(市川隆士記)

夏期僧堂のお手伝いを して思うこと

今年、会員(指導者)が三十一名と浄青の結集力を見て、去る七月二十七-三十日の間、お陰をもちまして無事に大役を終了できました。

今まで、私も堂生として三回ほど参加させて頂きました、その時よりも近年の方が参加人数が大分増え、とても喜ばしいことです。小さい頃自分だけが違った環境にいるように思えたのですが、僧堂に入ると、同じ立場にいる者が多くいて、安心感と共に、自覚、更に自信まで出て来たように思いました。振り返って見ると、今の私にとって、この僧堂が非常にプラスになっていたことを痛感します。

(塩沢智彦記)



総会報告

四月二十八日大本山光明寺において神浄青総会が行なわれ、前年度各報告事項承認ののち新年度新役員が選出された。
また総会に先立ち総会記念講演として、寺内大吉先生より「善導忌を迎えて思うこと。」と題して講演が行なわれた。

記念講演（要旨）

善導忌を迎えて思うこと

寺内 大吉 先生

来年に善導忌を迎えるに当り、自分なりにその人間像を浮び上がらせてみたい。
しかしその善導大師ほど良く分らない人物はいないので、これは研究不足というよりむしろ方法論で少し窮屈な姿勢を取り過ぎていっていると思う。

善導大師が長安で教化していた頃は信行の三階教（血肉死施、捨身往生）が大きな力を持ち、浄土教と非常に近い関係にあった。
善導がその三階教を否定したことは彼の書物でも明らかであるが、その後の中国の浄土教は三階教的色彩を帯びたものとなっていた。

後の法然上人の「偏依善導」という言葉はこの中国の三階教的浄土教を強く否定し、真の浄土教は善導の教えだけであるという別の意味も込められているのではないだろうか。



講演中の寺内先生

自殺や捨身往生を否定し、与えられた生命を守り、生きぬくということが浄土教の教えであり他力本願というのはそういうことである。
今日中国との交流がさかんであるが、まだ互いに真の姿を出して理解し合うというにはほど遠く、この善導忌をきっかけとして互いに真の姿を出し合い理解し合っていくには必ず本当のものが引き出せるであらうと思う。

また日本の過去において鎌倉や江戸などそれぞれの各時代における指導者達の多くがみな熱心な念仏者だったといことをみて、我々念仏者として日本の歴史をもう一度顧みる必要があるように思う。自らを知る上においても今回は良い機会であらう。

一五十四年度一

役員・理事

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|------|------|-----|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|-----|------|------|
| 監事 | 港北組 | 小田原組 | 小田原組 | 安養寺 | 安養寺 | 大信寺 | 三樹院 | 光福寺 | 伝福寺 | 良心寺 | 浄見寺 | 浄土院 | 中田寺 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 |
| 会長 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 副会長 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 会計 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 書記 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 編集 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 編集 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 常務理事 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 事務局長 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |
| 理事 | 三浦組 | 中郡組 | 中郡組 | 大信寺 | 宮本直秀 | 日比野隆道 | 今井正純 | 三浦正英 | 鈴木顕雄 | 野中岳道 | 菱科俊雄 | 長尾晃瑞 | 香川隆敬 | 高島善隆 | 麻生諦善 | 西井昭仁 | 念仏寺 | 港北組 | 港南組 | 港南組 | 京浜組 | 鎌倉組 | 小田原組 | 西念寺 | 北邨賢雄 | 森本祐康 | 石川到覚 | 長尾晃瑞 | 鈴木顕雄 | 梅雲寺 | 大運寺 | 晴雲寺 | 新善光寺 | |

一五十四年度一

年間計画

| | | |
|--------|------------------|--------|
| 五月十二日 | 第一回理事会 | 光明寺 |
| 六月九日 | 関東ブロック 十日）研修会 | 山梨善光寺 |
| 七月五日 | 清掃活動 | 光明寺 |
| 七月六日 | 開山忌 | 光明寺 |
| 七月二十八日 | 夏期僧堂手伝い | 光明寺 |
| 七月三十日 | 第二期理事会 | 光明寺 |
| 六月三十日 | 第三期理事会 | 光明寺 |
| 九月一日 | 第三回理事会 | 光明寺 |
| 九月二十九日 | 浄青家族親睦会 | 座間宗仲寺 |
| 十月六日 | 別時念仏会 パーティ | 座間キャンブ |
| 十月十二日 | 第四回理事会 | 光明寺 |
| 十月十四日 | 十夜前清掃 | 光明寺 |
| 十月十七日 | 伝導、念仏行進 | 光明寺 |
| 十月十八日 | 一泊理事会 | 光明寺 |
| 一月 | 第六回理事会 | |
| 一月中旬 | 光明寺成人式 | |
| 二月 | 他宗見学 | |
| 三月 | 定期総会 | |
| 四月 | 花祭り愛のプレゼント | |

後記

今回より新しいスタッフで編集をすすめてきましたが、なかなか上手くまとめられず、今後皆様の御意見を頂き、より充実したものにしていきたく思っております。
編集子